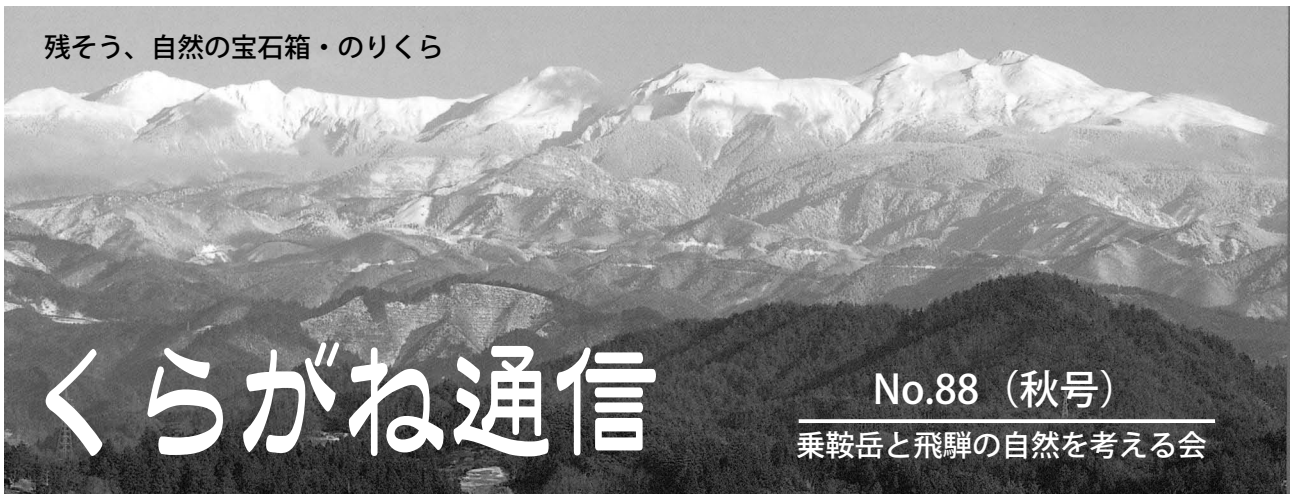


2023 年 1 月 30 日発行
http://iidalaw.net/norikura.html

第 23 回総会・環境講演会

3 月 4 日（土）　高山市民文化会館（2-5）

1. 第 23 回定時総会　15 時 40 分頃～

2022 年の事業及び決算報告、2023 年の事業計画及び予算案その他について審議します。

1 号議案　　2022 年会務事業報告
2 号議案　　2022 年収支決算報告
3 号議案　　2023 年事業計画
4 号議案　　2023 年収入支出予算

2. 環境講演会 「南限のライチョウ」

13 時 10 分開場　13 時 30 分開演～ 15 時 30 分頃まで
講師：朝倉俊治さん（静岡ライチョウ研究会会長）

朝倉さんは南アルプスのイザルガ岳や仁田岳、茶臼岳など**世界最南限のライチョウ生息地**で、1997 年より無積雪期に月 1 回程度の生息調査を実施。2007 年からは標識調査による個体識別も実施しナワバリの数やつがいの数、季節による移動の実態などを調べています。その調査結果をメインにお話ししていただきます。

年に一度の総会・講演会に是非ご出席ください。
なお総会に**出席できない方は**同封の**代理人選任届のご提出**をお願いします。

秋の里山こみちハイク　岩滝編

☆お弁当もって大人の遠足☆

大澤万里子

岩滝ブルーの空の中をアマツバメが自由自在に飛び回っています。いやあれはハリオアマツバメ？最高時速は 170km、これからオーストラリアへ渡っていくというから驚きです。

ここは岩井城址跡本丸の頂上です。明らかに人工的に溝を切って作った「堀切」、「切岸」、「曲輪」の説明を聞きながら登ってきました。南北朝 ～室町期、都から遠く離れたこの山奥で一体どんな動乱があったのでしょう？

先に見学した和田氏累代の墓とされる遍照寺跡も周囲から盛り上がった山城のような立地となっています。山一つ向こうの朝日町青屋にも山城があり、この地域をつなげるネットワークの中の一つだったのではないか？という田口先生の最先端の見解にワクワクが止まりません。

付近には縄文遺跡もあり、この岩滝には昔から脈々と人の暮らしがありました。古来ここはきれいな水と豊かな森のある住み良い土地なのでしょう。今でもそれは岩滝の宝物です。昔ながらの里山に昔ながらの山野草が残っているという直井（清正）さんの言葉が心に響きました。私たちはこの里山を守っていけるでしょうか？

弁慶がお酒を仕込んで蓋をしたという伝説を持つ「桶岩」。間近で見上げると大迫力です。大昔、上宝の方から火砕流がここへ押し寄せて来たんですね。なんというスケールでしょう・それと城址へ続く林道沿いで見る露岩は美濃帯のチャート。これは太古の海底で形成された堆積岩ということです。海の底の岩が今ここにあるというこの不思議。ふだん何気なく見ている景色も専門の先生方のお話を聞きながら歩くと、急に違って見えてきます。まるでタイムマシンに乗って色々な時代の岩滝を旅してきたような里山歩きとなりました。盛り沢山な内容にもう頭はクラクラ。街道の馬頭様が微笑んで見てござる。秋晴れの良い一日をご一緒させていただきありがとうございました。

☆見事に晴れた秋の一日 ☆

金澤都子

去年の感激が忘れられず、2 回目の参加です。神様が大歓迎してくださったのか暑いくらいの、今年の里山こみちハイクでした。今年のハイクは、まるでタイムトラベラー。時空を超える旅人になりました。時の始めは、120 万年ほど前の火山の爆発に拠る地形変化。

なになにその頃って、ホモサピエンス？原人の頃？などと思っている私の目の前に、巨大な岩、桶岩が現れました。牛若丸に負けた弁慶がお酒を入れたらしい。なみなみと入った辛口の酒を想像してしまった私。後ろに広がるのは、柱状節理のそそり立つ屏風の大岩。あの上に

座って弁慶は悔しい酒を飲んだのかしら。それとも大笑いをして牛若丸を称えたのかしら。

さあ、タイムワープ。南北朝時代へ。地元の豪族、和田氏の累代の墓へ。苔むした五輪塔は、当時の想いまでも閉じ込めて静かに佇んでいます。そして室町時代へ。豪族の城と言われる和田城。初期の山城だとか。ここがお城？と思わせる険しさと狭さ。あちこちに、小さく区切られていたであろう曲輪（郭）の目印が、当時の質実剛健を物語っていました。山に護られたお城は、麓の村を護るように翼を広げていたのかもしれません。

地蔵菩薩や不動明王、千手観音、馬頭観音、弘法大師、青面金剛のお顔を拝見しながら歩く秋の道。アキノキリンソウ、ヨメナ、サルナシ 小柿などなど秋が寄り添ってくれています。あの石仏たちも、時代の流れや季節の流れを受け止め、人の心にもそっと寄り添ってくれていたのでしょう。里山こみちハイクトラベラーの、笑顔や笑い声も、しっかり見つめていてくれたかしら。

来年はどんな旅になるのかしら？お世話をしてくださった皆様、ありがとうございました。壮大な時の流れを感じたひとときでした。

☆岩井町めぐりに参加して☆

荒家 敏伸

マリリン（大澤万里子さん）のお誘いで「飛騨と乗鞍岳の自然を考える会」に初参加でした。まず、第一印象が「面白い！」ツアーでした。

私は滝町で焼き物の工房を営んでいますが、工房名を竜覚（りゅうかく）窯といいます。漆垣内町の谷口いわおさん（ワラ大学を開いていた）が名付け親です。

工房名が縁で以前より和田氏については関心

があり、史跡にも行った事がありました。また、十年以上続けて、神戸さんちかホールでものづくりの人達とグループ展を開いていて、その折に生田神社や湊川神社を訪ねたりします。JR 神戸線 三宮、元町、その次の神戸駅下車した所に湊川神社があります。この神社には楠正成をお祀りしてあります。神戸の人達には「楠公（なんこう）さん」と呼んで親しまれています。ここに「**※瀧覚坊の四つの教え**」という案内が掲げられていて神戸との縁を感じていました。

今日の田口先生の解説で和田氏は大阪が出身地であり、「和田氏の乱」で北条義時に敗北して、岩滝に落ち延びた事を教えて下さいました。「大日本楠公会」（こんな会があるそうです）発行の「瀧覚御坊と大楠公抄録」には「和田瀧覚坊は其の血統にて鎌倉時代末より吉野朝時代に現れ、大楠公夫妻を指導された聖僧で有る。」と記されています。

さらに、「瀧覚坊聖之瑜の事由」に「観心寺（河内長野）の古傳に依れば瀧覚坊は飛州の人、僧名の瀧の字は其の出生の地名に由来すると傳う鎌倉を追はれて飛騨の山中に隠遁せる和田の系流を引くものにして出家して観心寺塔頭の中院に正錫として大楠公の幼時の薫育に当たれりと傳う・・・」とあります。

その和田氏が築いた岩井城は山城ネットワークの意味があり信州木曾勢との前線という事で大河ドラマの歴史絵巻が目の前に浮かび、鎌倉

と岩滝地域が繋がってしまいました。

直井（幹夫）先生のお話もとてもわかり安く解説してくださり、桶岩が何百万年も前に出来たものであり、それを目にする事ができることに、驚きと不思議を感じました。私たちが暮らしている高山が 3000m 以上の深海で出来た岩盤が隆起したものであると、悠久の時間とスケールの大きなお話しでした。

知らない事、知識を現場で学ぶ面白さを実感出来ました。楽しい企画を立てて下さったスタッフの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

（参考） 平成 9 年 岐阜新聞　飛騨人のあしあと
田中彰氏（飛騨教員史学研究会員）は
「後醍醐天皇のために一生をささげて忠誠を尽くした正成の生き方は、この**四つの教え**によるといわれる。」と書いてみえます。

※瀧覚坊の四つの教え（四恵）

父母、衆生（多くの人々）、国王、三宝（仏、教典、僧）

資料協力 小林 洋子

飛騨の峠【その 9】

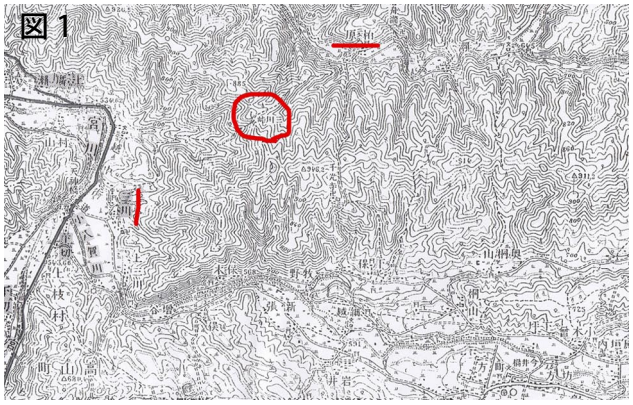
木下喜代男

三川峠 (840m) ー御用炭が柏原集落から高山へ運ばれた峠

埋れつつある峠の執筆には、言うまでもなくフィールドワークが必要である。事前の文献調査、ヤブを漕いでの現地探索、麓でお年寄りからの聞き取りだ。そのうちの聞き取りは、実際に歩いたことがある方の多くが既に鬼籍に入っておられ、年々困難になっている。それでもお会いできた方は、快く昔のたいへんなご苦労を今では懐かしみながら話していただけ、ありがたかった。長年飛騨の風土と共に生き、風土そのものを体現しておられる方々とのお話は心がなごみ、まことに楽しいものであった。

『高山市史』「街道編」に添付の「大正 4 年発行大日本帝国陸地測量部 5 万分の 1 の地形図」（図 1）を見ていたら、旧丹生川村柏原と旧国府町三川を結ぶ峠道があり、三川峠の名前が載っていた。いつもの癖で気になり、早速梅雨の晴れ間に入って見た。

旧国道 41 号線の三川集落北端から奥穂ゴルフ練習場へ入る道がある。入るとすぐ左に林道があるので、動物侵入よけの柵を開けて入らせ



てもらう。少し進むと林道が 2 俣になっているが、地図を見ると峠道がある尾根の末端だった（図 2、次ページ）。

右へ折れて 1 キロほど登ると、左側の大きい木の下に石仏がおられた。頭部が炎髪なので馬頭観音様であることがわかり、拝礼をする。（写真 1・2）「右やまみち 左柏原」と彫ってあり、年号は不明だったが「明治」の字があった。そ

して左下には「三川峠」と書いた小さい石柱があり、そばから道が入っていた。この付近の広いところに駐車して峠道に入る。はじめ広かった道はすぐ山道になる。倒木やヤブがあるものの、掘割になったしっかりした通が尾根上についていた（写真 3）。

ヤブを漕ぎながら登ってゆくと、上部で左から古い林道が入っていて峠道が切断されていた。その先の確認を怠ったため、左へ入らねばならないところを右に入ってしまった。途中でおかしいと気がついたが、そのまま急な沢を登る。広い主稜線に出て地図、GPS で確認すると、やはり峠はここの北側であることが判明。

主稜線を北へ辿るとすぐに鞍部へ。両側にしっかりした道がついていて峠に違いないことがわかり安堵（写真 4）。以前柏原で聞いていたとおり、ここに石仏はなかった。

柏原側へ下って見るが、随所に倒木があるもののしっかりした道が残っていた。（写真 5・6、次ページ）途中から掘割状になり、どういう目的か盛土の部分もあった（写真 7、次ページ）。後で荷車も通ったと聞いたので、そのための盛土であろう。

ヤブを漕ぎ、ときおり倒木をくぐり、跨ぎながら、ゆるやかな地形の広葉樹の中をどんどん下る。当初中間地点で引き返すつもりだったが、つい欲が出て林の間越しに柏原集落が見える所まで下ってしまった。

写真５

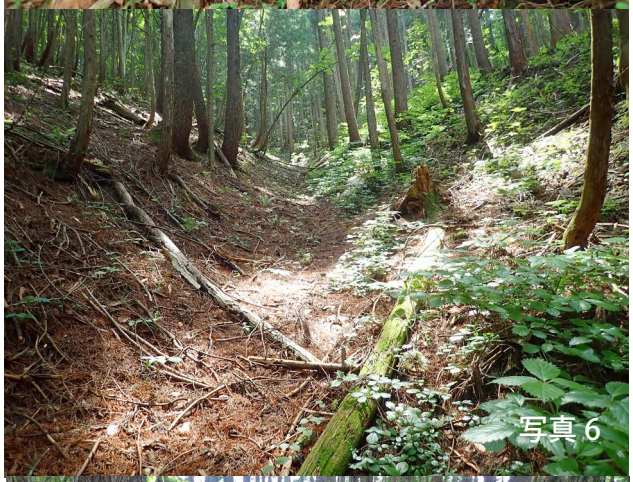


写真６

写真７

ここまでくれば集落へ降りる他ないとさらに進む。尾根末端の倒木が多い急斜面で道を見失い、ヤブを分けて下ったところが、集落のはずれにある土木機械の車庫だった。降りたとたんにわか雨になり、車庫の庇でしばし雨宿りをする。すぐ止んだので集落内の林道を歩き、以前千光寺峠の道を教えてもらった公民館そばのＫ家を訪問した。

奥さんが出てこられ、三川峠を越えて来たといったらびっくりされていた。峠の登り口を訪ねたが、歩いたことがないのでわからないとのことだった。また峠を越えて帰ると言ったら、車で三川まで送ってあげると言っていただけた。ありがたかったが、こういう時節（コロナ感染拡大時）なのでと丁重にお断りし、再度尾根に取り付く。はじめはヤブだったがすぐに道が見つかり、峠まで戻る。

三川集落側へ下ったが、古い林道のところで道を見失った。やむなく林道を下って駐車場所へ戻ったが、往復五時間半を要した。

帰路、果樹園でブドウの袋かけをしておられたおばあさん（94 歳）に峠のことを聞いたら、子供の頃よく峠まで遊びにいったと話してくれた。峠道には今とちがってヤマナシ、コクボなど実がなる木が多く、それを採るのが楽しみだったとも。この方は上広瀬集落の方だった。

また、登る前に峠道の取りつきを教えていただいたゴルフ練習場経営のＳさんは、昔小学校の先生から聞いた話として

「峠を下ってきた柏原の人は古川や高山へ行ったが、中には追分から渡し舟で対岸へ行く人もあった」

「昔は今村峠、三川峠、千光寺峠（柏原峠）を結ぶ主稜線に道があり、国府の人はその尾根道から千光寺や高山へ行っていた」と、話してくれた。その小学校（＝追分小学校）は、現在食堂などがある通称「奥穂」の場所にあったそうだ。そして峠入口の馬頭観音は、三川区でなく上広瀬区でお守りをしていることも聞いた。

なお、Ｓさんのいう「追分の渡し船」と別の場所かも知れないが、昔三川に「横岩」というところがあり、人馬ともに渡渉して川西へ行かねばならない難所だったが、天正年間金森長近が右岸を開削したという。これは高山城と古川の増島城の行き来のためであった。

『斐太後風土記』によると三川という地名は、この地区で小八賀川と宮川が合流するが、乗鞍から流れてくる**小八賀川の水温が宮川より低い**ことから**寒（さむ）川**と言われ、これが訛って三川になったという。同書には「寒川村」という名称も見られる。

他日柏原集落を訪れ、峠のことを聞いてみた。過日千光寺峠（柏原峠）の取材でお世話になったＵさん（男性・90 歳）とそのご家族は、次のように話してくれた。

「この峠を利用したのは親の代以前だが、柏原峠とちがって尾根がゆるやかなので、高山への炭の運搬に利用されたと聞いている」

「今も峠手前まではキノコ採りに行っている」

なお江戸期に代官所へ納入する炭は「御用炭」とよばれて「炭窯株」が設定され、柏原、三之瀬、大沼、森部、折敷地の奥荒城の集落に独占権が与えられていた。これらの集落で焼かれた炭は、代官所のほか高山や古川で市販され、特に森部村呂瀬のものは良質で、「ロッセ」と呼ばれていたという。当時の炭一俵は四貫（約 15 キロ）だったと思われるが、一度に 2 俵は運んだと思われ、峠越えはたいへんだったであろう。

前出のＫ家の奥さん（72 歳）は、自分は歩いたことはないが、親が国鉄高山線開通（昭和 9 年 10 月）の時、峠まで汽車を見に行ったと話していたのを思い出していただけた。

畑で除草作業をしておられたＳさん（男性・78 歳）は、小学校 4 ～ 5 年の頃親が高山で牛を買い、この峠を越えて帰ってきたことを覚えておられた。

柏原集落の人は同じ高山方面へ行くにしても、用事や荷の内容によって千光寺峠（柏原峠）と三川峠を使い分けていたようだ。なお柏原側の峠道登り口は、近年山肌が崩壊して消えてしまっていた。

（現地踏査：令和３年６月 26 日・初出『斐太紀』28 号を一部改稿）

ギフチョウ、チャマダラセセリ生息地の草刈り

松崎まみ

清見町でギフチョウ生息地の下草刈りは 2004 年から行っているが、2019 年は大雨で中止 2020 ～ 2021 年はコロナ禍で中止になり今年は 4 年ぶりの開催となった。下草がはびこり酷い状態だったがきれいに除草できた。

チャマダラセセリは岐阜県では高山市高根町に生息しているのみで、全国の多くの産地で絶滅している。数年前から少人数で下草刈りをしていたが、今回大勢で下草刈りをしたので生息に適した良い環境になった。あとは近くの産地から飛んできて棲みついてくれるのを願っている。

岐阜県の宝というべきチャマダラセセリを絶滅させないように、これからも下草刈り等で環境整備をしていこうと思っている。

鈴木俊文

清見町

10 月、11 月と草刈り活動に初めて参加した。

清見町西正寺付近では 4 年ぶりの下草刈りと聞いていたが、草どころか低木の枝が伸び放題で何処が道だかわからない状態。枝を刈って運ぶ作業を延々と続け、やっと蝶が飛べる道が見えてきた。ギフチョウのオスとメスが出会って飛び回ることのできる広い空間が必要だがそこも枝が大きく伸びていて枝を刈りたいが、地主の許可が必要ということで、なかなか手続きが

清見町

大変なようだ。

日本蝶類保全協会の方々が東京や大阪方面などから手弁当で参加され、清見町の町協の人たちも午前中参加された。清見町ではこの草刈り作業を大原地区と池本地区で隔年で実施しており、今年は大原地区の予定だそうだ。

高根町日和田のチャマダラセセリ生息地では、ノイバラがはびこり、刺に引っかかりながらの長時間作業となった。広大な旧スキー場跡地ではエンジン草刈り機部隊が大活躍だった。

チャマダラセセリの生息が確実なのは岐阜県、岩手県、北海道のみだそうだ。幼虫が食べる餌は、ミツバツチグリやキジムシロなどバラ科植物で、これらの復活を目指しての草刈り作業だった。

遠方から駆けつけてくれる人たちに感謝し、貴重な宝が棲みついてくれる環境を整えることに、私たち地元の者も汗を流したいと思っている。

■ 会員を募集しています！　年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に入会をおすすめください
・郵便振替　00800-8-129365　　振 込 先　乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第 88 号 (冬号) 2023 年 1 月 30 日 発行
発行者　乗鞍岳と飛騨の自然を考える会　〒 506-0055　岐阜県高山市上岡本町 4-218-3　飯田　洋
TEL：0577-32-7206・ FAX：0577-32-7207
下記 URL のページから**くらがね通信のバックナンバー**が閲覧できます。
★ http://iidalaw.net/kuragane.html

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。
■ 編集責任者 : 松崎　茂　　E-mail : ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp　TEL：0577-34-4703
表紙写真提供 : 小池 潜　　印刷：山都印刷